

山岳部





1918(大正7年) チュラン・チュ南方山上の大観。鹿子木教授撮影。



1918(大正7年) パンジャブの水河とツオ・カッ。鹿子木教授撮影。



1920(大正9年) 地藏岳より三宝荒神。豊辺国臣撮影。



1919(大正8年) 白馬の山頂を目指す。二本末雄撮影。



1921(大正10年) メンヒよりアイガーまで。板有恒撮影。



1929(昭和4年) マチガ沢より見た谷川岳。本郷常幸撮影。



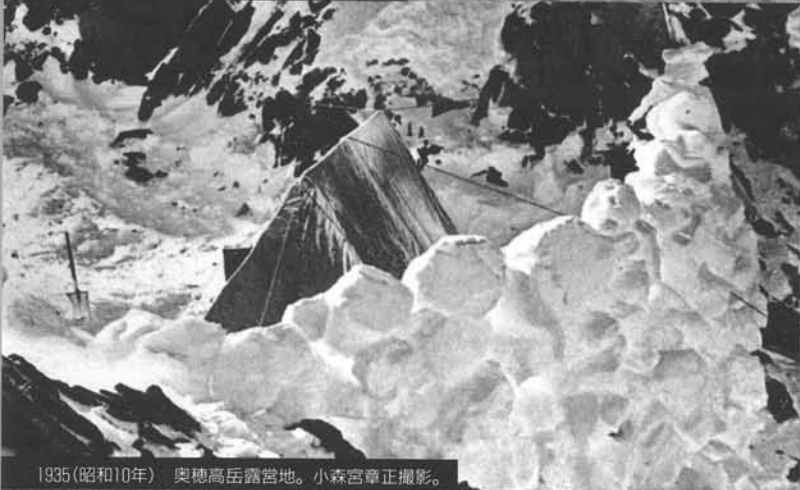
1935(昭和10年) 槍ヶ岳の露营地。小森宮章正撮影。



1935(昭和10年) 平蔵の露营地。小森宮章正撮影。(上下とも)



1935(昭和10年) 小西股圏谷。浜口武俊撮影。



1935(昭和10年) 奥穂高岳露营地。小森宮章正撮影。



1935(昭和10年) ハッ峰の帰路。小森宮章正撮影。



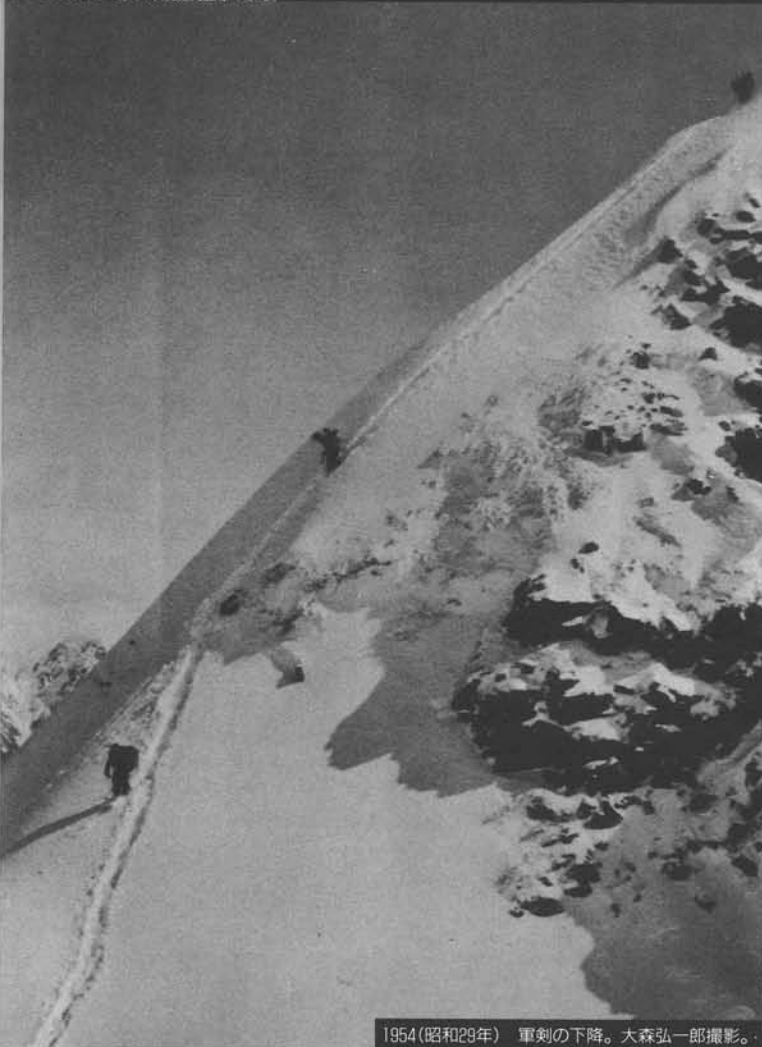
1936(昭和11年) 4月の立山。浜口武俊撮影。



1942(昭和17年) 千丈沢より北鎌尾根側稜。加藤喜一郎撮影。



1954(昭和29年) 剣岳へ。大森弘一郎撮影。



1954(昭和29年) 軍剣の下降。大森弘一郎撮影。



1955(昭和30年) 別山乗越に向かって。大森弘一郎撮影。



1955(昭和30年) 雲の平。大森弘一郎撮影。

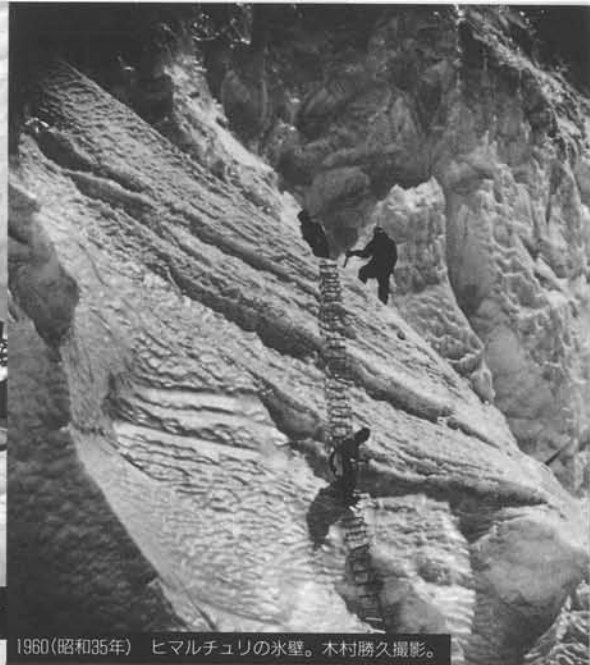
1915・5・24 大学としては初めての山岳会が榎有恒、内田節二等により本塾に設立される。／5・29 鹿子木貞信、小島烏水両氏を講演者として迎え、第1回大会を開催。
1918 山岳会の歌として北原白秋作詩、中山晋平作曲になる「山の唄」(守れ権現)が作られる。
1919・7 会報「登行」第1年発刊。／9 体育会に加入し、体育会山岳部となる。
1920・4 松本信広先生初代山岳部長に就任。
1921・1 山岳部のOB会として「登高会」発足。／9 先輩榎有恒アイガー東山稜の初登攀に成功。翌年帰国し、山岳部に本格的な雪と岩の近代登山技術をもたらす。
1924・3 奥穂高岳、北穂高岳、前穂高岳の積雪期初登頂。／5 瀧本誠一先生山岳部長に就任。／7 前穂高岳北尾根および屏風岩慶應稜初登攀。／11 創立10周年記念祝賀会。
1925・7・21 カナディアンロッキー登山隊

アルバータ峰(3619メートル)に初登頂。
1926・1 厳冬の剣岳に初登頂。
1928・1 前穂高岳北尾根積雪期初登攀。／3 前穂高岳北尾根四峰において遭難、先輩大島亮吉死亡。
1930・1 厳冬の奥穂高岳初登頂。北岳にて遭難、野村実死亡。
1931・1 先輩三田幸夫インド、クルー地方のロータン・パスに冬季登山。／3 槍ヶ岳より奥穂高岳までの積雪期初縦走。
1932・4 剣岳ハッ峰上半積雪期初登攀。／7 北海道日高ペテガリ岳初登頂。／8 部長瀧本誠一先生死去のため三辺金蔵先生山岳部長に就任。
1933・1 西穂高岳において初めて天幕を使用、高所露営を試みる。3月には剣岳でも高所露営をしてハッ峰、源次郎尾根等を登る。この後ヒマラヤ登山をめざし、高所露営、雪洞、極地法などの高所登山技術の研鑽に励む。

1935・6 山岳部創立20周年記念祝賀会開催、席上登高会の歌として「旧き友よ」発表。／7 剣岳ハッ峰六峰Cフェースリッジルート初登攀、慶應ルートと呼ばれるようになる。
1936・4 剣岳早月尾根を登り、頂上に雪洞露営を試みる。／5 医学部三四会山岳部と合体。／11 山岳部有志により「ウム・デン・カンチ」の抄訳を刊行。
1937・12 極地法により西穂高岳より奥穂高岳を登る。
1938・12 前穂高岳北尾根ハッ峰側稜より奥穂高岳を極地法で登る。この尾根は現在、慶應尾根と呼ばれている。
1939・6 三田ルームが体育館内に移転。／12 早月尾根より厳冬のハッ峰を1峰まで完登。
1940・11 山岳部創立25周年記念祝賀会開催。
1941・5 部長三辺金蔵先生より厨川文夫先生に交代。／7 文部省の命により、この年の



1960(昭和35年) ヒマルチュリ6800メートルの第4キャンプ。大森弘一郎撮影。



1960(昭和35年) ヒマルチュリの氷壁。木村勝久撮影。



1960(昭和35年) ヒマルチュリ・ベース・キャンプ撤収の朝。大森弘一郎撮影。



1960(昭和35年) 山田隊長よりルート工作隊までの無線指示。木村勝久撮影。



1960(昭和35年)・5・24 ヒマルチュリ7892メートル初登頂の田辺寿隊員。原田雅弘撮影。



1956(昭和31年) 奥穂高所露営。大森弘一郎撮影。

夏山登山は全面中止となる。

1942・12 北鎌尾根末端より槍ヶ岳極地法登山により初登攀。

1944 戦局悪化にともない、登山はほとんどできない状態になる。空襲に備え、三田の道具、図書などを日本橋国分商店倉庫に運び、保管。

1945・11 戦後第1回の山行として丹沢山のテント行を行う。相内武千雄先生山岳部長に就任。

1950・3 積雪期の北岳より聖岳まで縦走。サポート隊の和田滋、小西股にて遭難死。/11 戦災により発行直前になり発行不能となった「登高行」第14号、ようやく発行される。/12 西穂高岳より奥穂高岳極地法登山。

1952・12 前穂高岳北尾根極地法登山。

1953・3～4 剣岳より西穂高岳までの雪洞利用による縦走に成功。この年に日本山岳会によって行われた第1次マナスル登山隊には

隊長として三田幸夫、医師として辰沼広吉、隊員として加藤喜一郎、山田二郎の4先輩が参加。/12 針ノ木岳より前穂高岳までナイロン天幕を使用して縦走。

1954・3～6 日本山岳会第2次マナスル登山隊に副隊長谷口現吉以下辰沼広吉、加藤喜一郎、山田二郎、松沢幸雄の5先輩が参加。7月洞沢、11月丹沢山、翌年5月北穂高岳と遭難が続発し、高校生4名、大学生2名が死亡。

1956・3～6 日本山岳会第3次マナスル登山隊に隊長として横有恒、隊員として辰沼広吉、加藤喜一郎の3先輩が参加し、マナスルの初登頂に成功。/11 横有恒マナスル登頂の成功により文化功労者賞受賞。

1957・12 笠ヶ岳クリヤ谷より奥穂高岳まで極地法により登山。

1958・7 剣岳ハツ峰六峰Aフェースにて久富勝平転落死亡。/12 中岳頂上直下にて雪

崩のため遭難、酒井信男、平塚泰一郎、吉沢誠敏、早川節雄の4名死亡。

1959・3～6 日本山岳会ヒマルチュリ登山隊(東面)に田辺壽先輩参加。/4 山岳部長相内武千雄先生より峯村光郎先生に交代。/8～12 山岳部ダウラギリII峰偵察隊派遣、その帰路ヒマルチュリ西側に登路を見いだす。

1960・3～6 慶應義塾創立100周年記念ヒマルチュリ登山隊はヒマルチュリ(7892メートル)の初登頂に成功。/10 平塚氏寄贈により吾妻山に山岳部山荘を開荘。

1963・10 剣岳小窓尾根にて小松賛平転落死亡。

1964・11 山岳部創立50周年記念祝賀会を大手町産経ホールで開催。

1965・11 吾妻山山荘失火により焼失。

1967・9～11 山岳部現役のみによる海外登山として、ニュージーランド・アスパイアリング峰に登山。



1960(昭和35年) 大氷壁下部をゆく。木村勝久撮影。

1971(昭和46年) メントーサ峰第1
キャンプ。竹村真撮影。



1970(昭和45年) パウダ峰よりヒマ
ルチュリ東尾根。磯弥須彦撮影。



1967(昭和42年) ハンター西尾根よりフォレイカー峰。磯弥須彦撮影。

1969・9～11 日本山岳会第2次エベレスト南壁偵察隊に隊長として宮下秀樹、副隊長として田辺壽先輩参加。／10 吾妻山荘再建なり、槇有恒先輩らを迎え開荘式を行う。

1970・2～6 日本山岳会エベレスト登山隊に成田潔思、堅野正三先輩参加。成田隊員は高山病のため死亡。／3～5 ネパールヒマラヤ・パウダ峰遠征隊、板矢晏男隊員転落のため死亡。後初登頂に成功。

1971・6～7 山岳部パンジャブヒマラヤ・メントーサ峰(6443メートル)登山隊、5550メートルまで到達。

1972・4 内山正熊先生山岳部長就任。

1973・12 山岳部創立60周年記念講演会を三田演説館で開催。

1974・4 京王プラザホテルで山岳部創立60周年記念祝賀会開催。／11 三田幸夫先輩紫綬褒章を受賞。

1977・7 島崎隆男先生山岳部長就任。

1980・2～8 日本山岳会チョモランマ登山隊北壁隊隊長として宮下秀樹先輩参加、北壁よりの初登頂に成功。

1982・4 堀江湛先生山岳部長就任。

1983・3～6 ネパールヒマラヤ・チャマル峰(7177メートル)登山隊、約7000メートルまで到達。帰途、碓宏一隊員(商学部4年)雪崩のため死亡。

1984・9 山中山荘で前夜祭。／11 銀座交詢社において山岳部創立70周年記念会を開催。

1987・10～11 偵察隊。

1988・3～5 日本・中国・ネパール三国チョモランマ・サガルマタ交差縦走隊に報道隊員として井原敦先輩参加。

1989・5・22 槇有恒先輩死去。

1990・4 鴨野弘嗣、大島正浩、菅野健也、四倉英二、野々村美宗の5名が冬山合宿中、槍ヶ岳で他大学隊の遭難救助に活躍したこと

で、本塾の善行表彰を受ける。

1991・10～11 1991年日本・中国ナムチャバルワ合同登山隊に総隊長として山田二郎先輩、報道隊に井原敦先輩参加。

1970(昭和45年) パウダ峰6672メ
ートル初登頂。柴田清康撮影。

